

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 三島由紀夫 『金閣寺』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

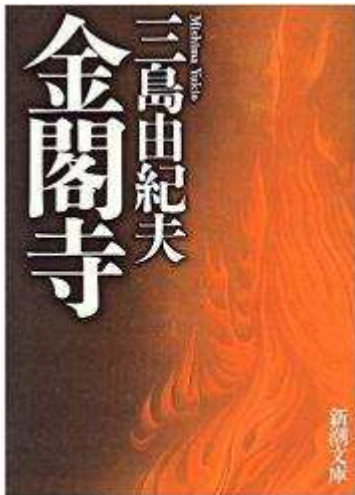
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 125 回のツイキャス読書会の課題図書は、三島由紀夫の『金閣寺』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『金閣寺』 感想文

筋を追うのがやっという、とても難しい小説でした。

私は父の言葉から、金閣に対して美の幻想を抱くようになった。

しかし、現実の金閣と私のイメージとのギャップに愕然とした。

だが、この差異は発展的に解消し、金閣は、さらに崇高さを加えた美の幻想となった。

金閣は私を包み込み、私を無言で支配し、のしかかってきた。

私は、そんな金閣のから逃れたいなくなった。

女性とのアバンチュールは、金閣の幻影が現れて腰だけに終わってしまった。

女と私との間、人生と私の間に金閣が立ち現れるのだ。

私は金閣によって、人生から隔てられていると考えるようになった。

そんな金閣を、私は支配してやる、と思うようになった。

寺から家出した私は、日本海の荒れる海を眺め、「金閣を焼かねばならぬ」という思いに至った。

私は金閣の破壊によって 世界の意味は確実に変わるだろう、と思った。

それは、類推による金閣の不滅が何の意味をもたない、ということだ。

学友の柏木は私に、「この世界を変貌させるのは認識だ」と説いた。

しかし、これに対し私は、「世界を変貌させるのは行為だ」とやり返した。

そして、美的なものは、もう僕にとっては怨敵だ、言った。

私は、五番町の遊廓に行った。

金閣の強迫観念は、もう、無くなっていた。

私は何も夢みてはいず、女によって人生に参加しようなどと思っていないからだ。

そのため、娼婦まり子との逢瀬に金閣は現れなかった。

まり子は、私を全く普遍的な男として扱った。

普遍的な男と化した私は、もう、放火の決行に老師からの決別も必要としなかった。

来客の桑井禅海和尚からの言葉で、私は初めて空白になった。

空白の中で決行できる私になっていた。

金閣の美の構造は虚無だと悟った。

放火後、私の死に場所である究竟頂は開かなかった。

拒まれていると意識した私は、戸外に飛び出し、左大文字山の頂きまで走った。

私は、頂から燃えさかる金閣寺を見下ろし「生きよう」と思った。

(おわり)

『金閣寺』を読んで

課題図書になられなければ、一生、三島由紀夫文学に触れなかったでしょう。感謝です。

あらずじと感想が、まぜこぜになりますが。

貧しい寺に生まれた主人公は、父親より、金閣より美しいものはないと言われ、そう思い込むことになります。

さらに、主人公は、美を問題に生きる事になります。

美は、絶対的に存在するのか？ 或いは、『戦乱と不安、多くの屍、血が金閣の美を富ますのは自然・・・』(P46 より引用) 『美だけ思いつめると、人間はこの世で最も暗黒な思想に至る』(P62 より引用)、これは、三島由紀夫さんの哲学？ 話が前後しますが、有為子の登場で、私は、金閣の名を借りた女性の話として読み続けました。

例えば、金閣は乳房。

『柏木の発言、我々が突如として残虐になるのは、うらかな春の午後、芝生の上、木漏れ日の中。』(P242 より引用)

愛或いは恋愛は、破壊が少なからず含まれているとおもいました。

吃りも、愛の中では、自然と思いました。

文章が難しく、読み難かったです。三島由紀夫は、美意識が強いんだな～。以外とエロティックでした。

最後に、主人公がタバコを吸うところなど。妄想と幻想が思想を作っているような。

(おわり)

『金閣寺』 感想文

高校生の頃、青い衝動に突き動かされ世に名作と呼ばれる文学作品をいくつか買い揃えた。それは『罪と罰』であり『人間失格』であり『仮面の告白』であった。

言うまでもないが、読書経験の浅い高校生にこれらを満足に読み進められるわけもなく、ページ数は少なく、文体もさほど難解でない『人間失格』を読了するのが関の山であった。

手元に『仮面の告白』を置く私を見るにつけ、父は母に「あの子は大丈夫だろうか？」と漏らしたと言う。

なにが「大丈夫」なのかは未だにわからないが、あの時、息子としては心配する父に「大丈夫だよ。読めなかったから」という回答をきちんと返してあげれば良かったと思う。

そういった出来事を経て、この度ついに三島童貞を喪失した。

まず感じたのは、その日本語の美しさである。

読書中にツイッターにて「美しい日本語を織るように」と表現したが、若干の訂正を加えたい。

「織る」だと女性的な美しさに近く、三島的とは言えない。言うなれば「精緻」であり「構築」である。

三島由紀夫はつまり、美しく精緻な日本語で、文章の中に『金閣寺の美しさ』を構築したかったのではないだろうか、とつまらん感想をすら抱いてしまうほどであった。

溝口が囚われた「美」と「破壊」は、三島由紀夫の美学そのものであったのではないだろうか。彼もまたその人生の終局において、肉体の破壊を以って美学を完成させたのだらう…というのは若干ナルシスティックな感想であろうか。

谷崎潤一郎の著書『春琴抄』の中で、美貌を破壊された春琴に忬度し、弟子の佐助は自ら両眼を針で刺し貫いた。解釈は多々あるが、それは美を永遠に心に残すためではなく、愛ゆえの忬度であった。その結果、二人は同じ世界にゆき、一つになることができた。

作品外の仮定は建設的ではないが、もしも溝口があの時、究竟頂に入ることができていたとしても、彼には金閣と心中する覚悟を最後まで保てなかったように思われてならない。だからこそ金閣は彼を拒んだのだと思う。

(おわり)

中 2 病に火をつけて

「これはどういう意味なんだ!？」

と詰問する国語教師で担任の副司先生と目を合わせないように僕は、机の上に置かれた原稿用紙を見るふりをした。副司先生の隣には丸々と太っているが肌がやたら綺麗な学年主任の老師先生がじっと黙って目を瞑っている。

僕が放課後呼び出されて生徒指導室に行く前に鶴川君に「別に何もしてないから」と言うと彼は安心したように笑った。

柏木は教室の隅で花瓶に花を生けていた。

地味で友達が少なく、淡々と学校生活を過ごす僕が呼び出しを受けた理由は、アメリカ人の血が入った3年のジョージ先輩の命令で美術のデッサン用マネキンに卑猥なポーズをさせ壊してしまったからでも、最近成績が下降の一途を辿っているからでもなく、金閣寺を読んだ感想文に

「金閣寺に火をつけた私の気持ちがわかります」

と書いたからみたいで、その部分には赤い線が引かれている。

「何か悩みでもあるなら先生に言ってみろ」と副司先生は言うけれど、これと言って特にそんなものはないから困ってしまう。こんな時禅海和尚みたいな人がいてくれたらなあ、と思ったくらいだ。

だいたいこの学校の大人達は空襲で焼かれなかった京都の街の人々のように袴が外れている。

柏木が言うには華道部の顧問の先生は「正しい性教育の為」とか言って男子生徒にオツパイを見せてくれるらしいし、この間塾の帰りに僕は老師先生が制服姿の女子高生と腕を組んで歩いているのを目撃してしまった。

「すみませんでした。これからは気をつけます」と仕方なく僕が言うと老師先生が口を開いた。

「君の事は君のご両親からよろしく頼む、とよく言われているからな。今日はもう行ってよろしい」

副司先生は不服そうだったが、僕は軽く頭を下げて生徒指導室を出た。

それから図書室で本を借りてから帰った。

ドラッグストアで菓子パンを買い、学校を見下ろす山の上の公園でそれを食べながらなぜだか臨済の言葉が浮かんだ。

そうだ、僕は色声香味触法からなる現実世界に生きながら、それらに隷従せず、支配していこう。一切非我の環境に君臨しよう。僕は僕で何ものにも拘束されない。

そう思えたら自分が生きながら成仏した気になれた。僕は生きようと決めたのだ。

ポケットに入れていた睡眠導入剤をゴミ箱に捨てて自転車を漕ぎ坂を下って行く途中、お寺の前でいつも寝ている可愛い猫がいない代わりに、頭の上に靴を乗せた変なお坊さんが立っていた。

(おわり)

「金閣寺」感想文

今回、初めて読みました。とくに嫌いだとは思いませんが、三島由紀夫先生の本を自分から読もうと思わなかったので、「金閣寺」という小説があることを初めて知りました。

溝口少年の気持ちは私には分からないですが、同情できるかも、と思った所がありました。

(引用 はじめ)

「ええか。もうおまえの寺はないのやぜ。先はもう、ここの金閣寺の住職様になるほかないのやぜ。和尚さんに可愛がってもらうて、後継ぎにならなあかん。ええか。お母さんはそれだけをたのしみに生きているのやさかい」

新潮文庫P76

(引用 おわり)

金閣寺で修業して、和尚さんに認められるようにしっかり修行しなさいよ！ という意味かもしれませんが、これから修行して仏の道に進むときにこんな下世話な話を、母親から聞かされるのは気の毒だなと思いました。

しかも自分が生まれ育った寺は無くなり、もう帰るところが無くなったという心細さが可哀相だと思いました。

現実問題としては、帰るという事は無理かもしれなくても、帰れる所があるんだという心のゆとりがあるのと、無いのでは全く違うように思う。

嘘でも、帰って来たかったらいつでも帰っておいでよ。と言って欲しいなと私だったら思います。

金閣寺を自分の帰る所、というか居場所にするためには和尚さんに取り入って、他のお坊さんたちとも上手くやって、と何か本来の仏の道への修行とは違った事に神経を注ぐ事になるのではないのかな？ と思いました。

うまく世間を渡っていける器用な人なら、金閣寺の和尚さんの座を狙えるのかもしれない。

そして、丸々艶々の和尚さんになって、贈り物を積み上げるのだと思いました。

(おわり)

『美たる悪』

溝口は金閣を美そのものとして定義づけている。美しい光景や女性を見るたびに金閣が現れ、頭から離れない。このように溝口は美に対する並外れた執着を持っているように見えるが、今回読んでみてこの男は美なんかよりも、悪に囚われているのではないかと思った。

溝口にとって、美とは自分とかけ離れている、無縁の存在である。彼は吃りで、容姿も見すばらしく、いわば女にモテない男である。故に美を所有したがる面はあれど、美そのものと直面しない。恐らく自分の醜さを美が際立たせるからだろう。美に憧れながらにして、それを恐れている。

結果、彼は自分の「醜」を「悪」とこじつけ、悪を働く(美を傷つける)ことによって、美に触れようとし、また美の呪縛から逃れようとした。彼の呪い性や鞆の件や妊婦の腹を踏む行為はここから来ているにではないだろうか。

しかし、悪を美の陰として定義づけてしまったため、そもそもその悪というのがあやふやなのである。悪そのものが美を意識して行われている分、彼はどんどん金閣に囚われる。

最後のトドメを刺したのは、自分の悪を浄化してくれていたと信じ込んでいた鶴川さえも自分と同じく悪を抱え込んでいたの知ったことかと思われる。美と悪はもつれ合い、区別ができなくなった。金閣を燃やせば、残るのは美のほうなのか、悪のほうなのかを確かめられる。だが、最後まで彼は悪(美)からも拒否されてしまった。

美を支配することも、悪を働くこともできなかった溝口は、その後どう生きるのか。それを書いて欲しかった。

(おわり)

炭山韓国読書会のブログです。 <https://ameblo.jp/shimogashiwa/>

ツイキャスチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/c:nindaranna>

『 永遠と絶望 』

幼い頃から、金閣寺ほど美しい存在はないと父から聞かされて育った溝口。本物を拝するまでは、溝口の中に絶対的な存在として「金閣寺」は君臨していた。

だが、実際の金閣寺を見る機会を得ると、期待した以上の美でなかったことに落胆する。

吃音があり、顔も醜いと自認しているコンプレックスまみれの溝口からすると、金閣寺を絶対的な存在から、自らと同一化できる存在へと引きずり落としてしまったところから、後の「行為」を引き起こしてしまったのではないかと感じた。溝口は、「絶望」したのではなく、最初から絶望の中に生きていた。カフカの「変身」のグレゴール・ザムザのように。

当時、まだ続いていた第二次世界大戦を機に、金閣寺が爆撃による消失の恐れが出てくると、溝口は再び、金閣寺に美しさを見出す。金閣寺は永遠ではないと思うところから、同じく永遠でない自分と重ね合わせてしまう。しかし、戦争での消失から逃れると再び執着し、自らの手で破壊しなければと思いつめていく。例えば、有為子の死を願って、現実には有為子が死ぬと溝口の中で「永遠」になった公式を、金閣寺に当てはめたような気がした。永遠ではない美に固執する溝口。

溝口は、コンプレックスから自らを守る方法として、周囲から理解されないことを喜ぶ思考をデフォルトに据えた。それは、裏を返せば、誰よりも自分を理解してほしい、認めてほしいという叫びが私には聞こえる。自らが傷つかない哀しい落としどころだ。

だからこそ、金閣寺に火を放った後、金閣寺の最上階が開かなかった時、まるで金閣寺に人格があるようなショックを受けたに違いないと思う。

金閣寺は、自らに火を放った溝口を決して受け入れなかった。それは、溝口が勝手に自分と同じ存在に同一化した金閣寺自身の意志だ。今までは老師をはじめ溝口の間人間関係は「忖度」だった。初めて、はっきりと自らを拒絶された溝口は、やっと「生きる」方向へベクトルを切った。それまでは、金閣寺が溝口の間人間としての軸だったのだ。

金閣寺は自らを犠牲にしても、溝口の生きる意志を明確にさせたような気がした。

これからは、柏木も鶴川も有為子も老師も娼婦も…金閣寺もない世界で、自分自身を軸に生きていくしかない溝口。彼は、「生と死」ではなく「永遠と絶望」を行き来していた。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『バイトテロ金閣寺』

『金閣寺』を久々に再読したあと、たまたま『ザ・ビートルズ』というドキュメンタリー映画を観た。1962年のデビューから68年頃までの活動の軌跡だった。当初は、19歳の若者が、生意気にはしゃぎまわるというコンセプトのアイドルグループだった(そのコンセプトは、今でもジャニーズのアイドルに引き継がれているのには驚いた!)。世界を席卷してから、公民権運動が激しかったアメリカ南部のライブで、白人と黒人の座席のゾーニングの撤廃を訴えたり、キリスト教を誹謗して、宗教右派にボイコットされたりと、既存の価値観に反逆する若者のアイコンになっていった。故内田裕也さんやドリフターズが前座を務めた初来日コンサートでは、「武道の聖地を汚すな!」という訴える右翼の街宣車が、武道館周辺に多数押しかけ、厳戒態勢となっていた。ビートルズの存在そのものが、音楽を通じての社会革命だったのだ。後期になって、スタジオ収録がメインとなり、哲学的な傾向を深めるに至った。ジョン・レノンは、禪にイカれて、オノヨーコと交際しはじめ、瞑想的な作風にシフトした。また、反戦運動にも積極的にコミットしている。

『金閣寺』は、1950年の7/2未明に吃音に苦しむ溝口という学僧が、朝鮮戦争勃発(6/25)の社会不安にあおられて、『金閣寺』の古典的な美と心中するために、放火するに至るという話である。金閣寺を偶像化するあまり極端な行動に惹かれていくという彼の心理プロセスは、ジョン・レノンを銃殺したマーク・チャップマンの破滅的なそれと一致する気がした。

また『金閣寺』を燃やすというのは、よく考えれば、究極のバイトテロである。バイトテロ金閣寺。

『金閣寺』に描かれているのは、個人オーナーの経営するコンビニFCのような宗教施設だ。まるで、コンビニ金閣寺だ。門の制札は、バイトマニュアルだ。正社員の約束を反故にされたバイトの溝口。彼の金閣寺放火の予兆に気づきながらも、温情からか。改心を信じてか、彼を解雇しない老師は、面倒見のよい観光資源の管理人ようである。三島先生は、現在にも続く戦後青年の精神荒廃を『金閣寺』を舞台にして暴いてみせた。

溝口の深遠にみえるような犯行動機は、所詮、青春期の生意気ざかりにはしゃいで、自由になりたいという鬱屈に、理屈をつけただけのように感じた。

溝口がもし10年後の高度経済成長時代青春を迎えて、ビートルズでも追っかけていれば、尺八ではなくエレキギターを手にしていただろう。『美』ではなく、『自由』を追いかけただろう。そして、こじらせたあげく、結局は、来日したジョン・レノンを襲撃しただろう。しかし、なんで、三島先生は『自由』を語らず、『美』ばかり饒舌に語ったのか? 『自由』こそが、超越的認識の問題であり、美は、所詮は悟性と構想力(勝手気ままという意味での『自由』な想像力)の問題に過ぎないのに……

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343